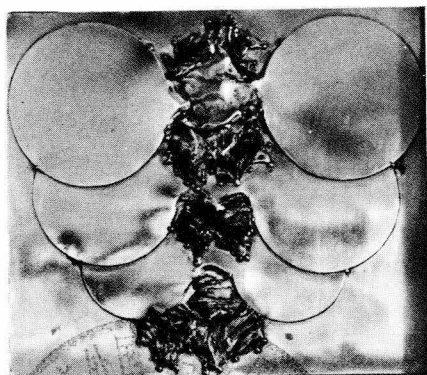


約束の地 高城修三



約束の地

高城修三



新潮社版



やくそく
約束の地

昭和五十七年七月一日印刷
昭和五十七年七月五日発行

著者 高城修三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 (三六) 五一一 振替東京四一八〇八
編集部 (三六) 五四一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

定価 一一〇〇円

© Shūzō Taki, Printed in Japan, 1982

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

約束の地・目次

第一章

再 会 7

木もれ日 22

農場へ 41

思いがけぬ人 51

絵葉書 72

第二章

酒房にて 83

じさい農場 98

第三章

長つゆ	118
神鳴り	134
彼岸花	153
収穫祭	165
仮面劇	184
告白する人	204
祭りのあと	232

裝幀
加納光於

約束の地

第一章

再 会

京都を七時すぎには出ていたのだが、名神高速の豊中インターから阪神高速にはいるあたりで朝のラッシュにぶつかってしまった。それ以来、ジープを運転する火野礼二の足がクラッチとアクセルをいらだたしそうに往復しはじめ、時おり舌打ちも聞えるようになっていた。舌を鳴らすたびに左目をきつくつぶるのは、火野のくせだった。助手席の水間信介は、そんな火野の横顔をちらとうかがってから、「九時までには、ちょっと無理だな」

と独りごちるように言って、もう十年近くも使っている安物の腕時計をのぞきこんだ。九時少し前のところで長針と短針がぴったり重なっていた。

「ふざけやがって」

火野はアクセルを思いっきり踏んで、進入口から強引に割り込もうとしていた乗用車の鼻先をかすめるように走り

抜けた。だが、すぐに渋滞してしまふ。建築廃材を満載したトラックが黒煙を吐きながら反対車線を疾走していく。きつい排気ガスの臭いが、幌をはずしたジープにふりかかってくる。

「これじゃあ、ジープが泣こうってもんだ」

火野が舌打ちをして言った。水間はかすかな嘔吐感があるのはいのぼってくるのを呑みこんで、高架の両側を埋めているすすけた街並みを見わたした。もう新緑の季節だというのに、ほとんど緑が見えなかった。果てしなくひろがる街を灰褐色のモヤがどんよりつつんで、遠くに臨海工業地帯がかすんでいた。大阪湾はモヤに溶けてしまっていた。四月の下旬にしても、妙に生暖かい朝だった。車が止ると、風もなかった。

「どうして木島は来なかったんだい」

水間はふと思いついて言った。

「知るもんか」

火野は前方を見たまま、素っ気ない声で言った。

「農場には寄らなかったのか」

「昨夜おまえに電話をしたあと農場へ行ったんだがね、やつは農場で待つ一点張りなんだよ。あの農本主義者は、いったん口にしたら絶対あとに退かんからな」

木島仁ならそうするかも知れないと思って、水間は口を

つぐんだ。昨夜おそく、火野から電話があつて、「明朝九時に土居太一郎が出獄するから迎えに行こう」と言われたとき、旧友の刑期満了の日をすっかり忘れていたことに驚くと共に、一瞬、土居をどんなふう迎えてよいのかためらった。不思議にも、水間は再び土居太一郎と顔を合せることになるなど考えてもいなかったのだが、次の瞬間には、「もちろん行くよ」と弾んだ声を上げていた。

「ダイちゃんも、すっかり変つただらうな」

火野は土居の学生時代の愛称をなつかしように口にした。水間はやがて対面することになる土居の容姿を想い浮べようとしたが、百九十センチを超える巨きないかつい軀はともかく、その顔になると、何度ふりはらつても、最後にちらと法廷で見た、あの無表情な顔になつてしまふのだった。十年という歳月を何とかその表情にかぶせてみようとするのだが、自分を裁いている法廷にまるで関心を見せなかった土居太一郎の顔は、記憶の中に凍りついてしまつて、水間の努力をうけつけようとしなかった。

「十年か……」

水間は力なくつぶやいて黙り込んだ。

「そうだよ、十年だよ。しかも、ダイちゃんには十年半ぶりのシャバだから、今夜は祇園あたりで派手に出所祝いをやろうぜ」

火野はカッカッと、わざとらしい陽気な笑い声を上げた。山科でジープに乗せられてから、水間がふっと黙り込むたびに、火野は出所祝いの話を持ち出し、笑い声をとばした。そこには過去の事件になるべく触れまいとする意図が匂つていたが、その気持は水間も同じだったから、火野の陽気なつくり笑いがはじけると、ほつとした。

大和川を渡つて、ようやく車の流れが速くなつたと思つたとたんに、ジープは高速道路を降りてしまつた。火野は付近の地理に明るいらしく、たちまち刑務所の高いコンクリート塀を探し出して、カイズカイブキの濃い緑の間から美しいレンガ造りの庁舎がのぞいている刑務所正門近くにジープを横づけした。でっぶり肥えた守衛の他に人影はなかった。

「遅れたか」

火野はジープから身軽に飛び降りて、守衛の方に近づいていった。水間も後を追つた。

「今日の釈放は二人のはずですが、まだ出ていませんな」
後ろで手を組んだ守衛が、うさんくさそうな視線をジープの方に泳がしながら言った。

「保安課で注意事項とやらを聞かされているんだろう。待合室まではいってみるか」

火野が正門わきの守衛室をあぐでしゃくつた。刑務所の

手続きに慣れた態度だった。

「ここで待とう」

水間は守衛の細い目を意識してジープの方にもどろうとしたが、そのとき、三十メートルほど向うに停車した白い乗用車の運転席に、女がひとりいて、こちらをうかがっているのに気づいた。車は五メートルもある頑丈なコンクリート塀のすそに、ひっそりうずくまっていた。

「女だな……。ダイちゃんの知り合いかな」

火野が水間の視線に気づいて言った。

土居に深い付き合いのあった女性がいたとは思えなかったし、出迎えに来るような肉親もなかったはずだ。今日釈放されるといふ、もう一人の囚人の出迎えなのかも知れない。水間がそう思ったとき、

「おご」

と火野が肩を叩いた。見ると、レンガの庁舎わきを三つの人影がこちらに向ってゆっくり歩いていった。

派手な服をまとった女と小柄なやせた男が肩を寄せ合っているすぐ後ろに、がっしりした大男がやや前屈みに歩いてくるのを見つけると、水間はその顔を確かめる前に、

「ダイちゃん」

と声を上げていた。だがそれは、とても土居のところにまでは届きそうもない、ささやくような声だった。

「アニキー」

口ごもった水間の背後で、突然、甲高い叫び声が上がった。思わず振りかえると、新緑をいっせいに吹き出している桜並木の下から、ヤクザ風の若い男が息せき切って飛び出してきた。

「おう」

と手を挙げて、アニキと呼ばけられた小柄な男は、髪を褐色に染めた女を引きずるようにして、小走りにかけだした。あとに取り残された土居は、ゆっくりと変らぬ速さでこちらに向ってくる。水間は心なしか緊張した。

「ダイちゃん」

火野が大声で呼びながら手を振ったが、土居はそれにも気づかぬふうで、目を伏せ、巨きな軀を前屈みにして、こちらに近づいてくる。

「テツ兄ィ、おつとめ御苦労さんだす」

頭を角刈りにした若い男が火野の横で大げさに腰を折った。耳が大きく横に張っている。テツ兄ィと呼ばれた男は、ちよっと胸を張ってから、火野と水間に鋭い目を投げつけた。

「おまえ一人か」

「へえ……」

テツの表情が陰しくなってくる。二十四、五と見える若

い男は落ち着かない様子でしきりに頭をかき、守衛室で訪問者用のバッジをもどしている女の方に、助けを求めるような視線を送った。テツの肩に羽織った黒いブレザーのわきから、女の顔がのぞいた。二十七、八だろうか、それとも、三十をすぎているのだろうか。年の分らない顔立ちだった。

「言うてたとおりやろ。五年前と変らんのはヤスさんだけや」

そう言つてテツの腕を取った女の後ろに、もう土居が立っていた。女の褐色の頭が土居のみぞおちあたりにあつた。

「久しぶりだなあ」

火野が、テツの前でべこべこ頭を下げているヤスと呼ばれた男を押しのけて前へ進むと、男はむっとして身構えたが、火野はそんなことにかまわず、土居の方にさっと手を差し出した。土居は初めて二人に気づいたように、伏目がちの目を上げた。表情を失なつたような顔は相変らずだったが、長い刑務所暮らしのためか、顔色はおどろくほど白くなつていた。坊主刈りの頭も奇妙な感じだった。それでも相応に年を取つた土居の顔にほっとしながら、水間はぎこちない笑いを浮べて会釈した。ちょうどそのとき、

「何じゃ、われは」

と声を押し殺したヤスが、火野の胸ぐらをつかんだ。火

野が落ち着きはらつた動作でヤスの手を引きがした。あたりに陰悪な空気が漂つたとき、土居の顔色をちらとうかがつたテツが、ヤスの肩をあらあらしく突いた。

「あほんだら、やめんか」

「けど、アニキ……」

「あほ。こつちは土居さんのお迎えや」

テツは土居よりも二つ三つ上に見えたが、土居を「さん」づけで呼んだ。

「土居さん、今日はワシんとこへ寄つてもらえますやろ」

テツが火野を威嚇するように言つた。土居は表情を変えなかつた。

「冗談じゃないぜ」

火野は、黙つて成り行きを見つめている土居の手を取つて、ジープの方へ向おうとした。水間はどうしたものかしばらくためらつていたが、不意に、何か言わなければという衝動にかられて、

「ダイちゃん、木島が農場で待っている。農場へ行こう」

と一息に言つた。土居の目に初めてかすかな笑みが走つたのを、水間は見のがさなかつた。

「農場だよ。去年の暮れから、おれたちが始めたんだ。君を待っていたんだ」

水間はそう言つてしまつてから、そうだ、おれたちは土

居を待っていたんだ、と思いついた。

「農場？ 土居さんを百姓に使おうってのかい」

テツが水間の前に立ちふさがった。

「そうだ、文句あるか」

火野が言った。ケンカを売るような口調が正門わきを再び険悪にした。

「おい、おい、いいかげんにせんか。おまえはまだ仮釈放の身だぞ」

先ほどからそれとなく様子をうかがっていた守衛が、テツを指さしながら、二、三步こちらへ寄ってくる。

「土居さん」

テツが哀願するような声でうながしたが、土居は黙って頭を振っただけだった。

「分りやした。それじゃあ、またそのうちにでも」

テツはあっさりそう言うのと、ぼんやり突っ立っていた女とヤスをうながして、桜並木の方へ歩いて行った。何を思ったのか、火野がテツを追いかけて、二こと三ことしゃべりかけ、そっと名刺のようなものを手渡した。水間は土居を見ていた。どこかしらおだやかな表情が、土居の白い顔に漂っていた。

「行こうぜ」

火野が照れ笑いしながらもどつてきて、ジープの方に土

居を引っぱった。

「すまん」

土居がぼそとした声をこぼした。

「すまんなことがあるか。昔の仲間じゃないか、そうだろう？」

火野が明るい声を響かせた。

土居が巨きな軀を窮屈そうに後ろの座席に押し込めると、火野は勢いよく運転席に飛び乗って、

「出発だ」

と叫んだ。その声で、水間が目を前方に移すと、コンクリート塀の下にうずくまるように停車していた白い乗用車のドアが開いて、ちょうど女が飛び出したところだった。

女は真つすぐこちらへ向って走ってくる。ジープを発進させようとしていた火野があわててブレーキを踏んだ。間近に立ちふさがった女を見て、水間は思わず息をのんだ。死んだはずの月岡真理子が、そこにいた。

「お姉さんを殺したのは、あなだね」

女は水間たちをにらみすえ、指を突き立てて言った。それを聞いて、水間は初めて、目の前の女が月岡真理子の妹なのだ気づいた。肩まで垂らしたクセのない髪も、眼尻がやや上っている澄んだ目も、きっぱりした口元も、月岡真理子に生き写しだったが、全体の印象はやはり別人のもの

のだった。年は二十七、八だろうか、死んだ姉よりもいくつか年を取っているように見えた。

女の人さし指は、放心したように目を見ひらいている火野と水間の間をさしていた。水間がぎこちなく振り向くと、土居がのっそり立ち上って、深々と頭を下げた。

「お姉さんを殺したのね」

女は腕を上げたまま同じことを繰り返したが、水間はその口調にひっかかるものを感じた。定かでないことを確認するような調子が隠れていたからだ。しかし、土居は月岡真理子の殺害犯人として十年の懲役刑を宣告され、今、出獄してきたばかりなのだ。わざわざ確かめることでもなかった。

「私に謝ってるの？ それとも、お姉さんに謝ってるの？」

土居は無言で頭を下げていた。長身のために肩から先が火野と水間の間に大きくかぶさっていた。

「何とか言いなさいよ」

女は急に眼頭をふくらませて言った。それでも土居をにらみすえた強い視線は変らなかつた。

土居が二人の間で腰を折っているために、水間は自分も詰問されているような気がした。すると、月岡真理子の葬式に、金子義三と連れ立って丹波篠山に向いた日の光景が、思いがけないかたちで浮んできた。真理子と同じ仏文

科に在籍していた金子が研究室を代表し、水間はユートピア研究会というサークルを代表する形で参列したのだが、焼香のおり、セーラー服を着た、真理子の妹らしい高校生が「あんたの仲間がお姉さんを殺したのね」となじり、それでも黙って合掌する二人に、「何とか言いなさいよ」と、眼を赤くして言ったのだった。横にいた母親が娘の取り乱した詰問を制したので、水間は逃げるようにして葬儀の場を辞した……。

「月岡真理子の妹らしいな」

顔を水間の方にすり寄せて、火野がささやいた。声がいっつになくこわばっていた。

「ああ」

水間は生つばをのみこんで、それだけ言うのがやっとだった。

十年ぶりに出獄してくる旧友とのしみじみした再会を想像し、そのいづらか気づまりな場面でどんなふうな態度をとればよいのか思い悩んでいたくらいだったのに、先ほどからの、あわただしい、意外な展開に、水間はすっかり面くらっていた。それにしても、あの月岡真理子の妹が、姉を殺した男を刑務所の前で待ちうけているとは……、一体、どうしたというのだろう。そんなことを思いながら、水間は女を見た。女はこちらにじっと目をすえたまま、ジープ

の前からゆっくり横へまわってくる。

「あなたが殺したのね」

女は運転席のわきから土居を見上げて、それまでとは打って交ったおだやかな口調で言った。土居が頭を上げて、小さくうなずいた。相変らず無言だったが、まるで初恋の人の前に立った内気な中学生のように、その顔はうつすらと朱に染っていった。

「どうして黙っているのよ」

女は土居の顔を見つめているうちに、もうこれ以上は耐えきれないというふうに感情を爆発させて言った。形のよい唇がわなわなふるえていた。

「何とか言いなさいよ」

と叫んで、女はさらにジープに詰め寄ってきた。女が間近に來ると、火野はにっと薄笑いをもらして、

「彼だって、罪をつぐなうて出て來たんですよ。もう、それくらいで充分でしょう？」

と、女に耳打ちするように言った。火野はすっかり持ち前のずうずうしさを取りもどしていたが、女はそれを無視して、

「言いなさいよ、本当のことを言いなさいよ」

と、激しい口調で繰り返した。そのとたんに、火野が怒りをふくんだ複雑な表情を浮べてチツと舌を打ち、シフト

レバーに手をかけた。

「行くぜ」

後ろを振り向きざまに出発の声を放って、火野は思いつきアクセルを踏んだ。中腰になっていた土居の巨きな体が無様に後方へ倒れ、女の小さな悲鳴が上った。水間が女の声を追って振りかえると、女は呆然と突っ立ってジープを見送っていた。

「月岡の妹だと思っておとなしく出りゃいい気になって、あの女、一体どういうつもりであんなわけの分らんことを言うんだい。本当のこと？ ケツ、なんでダイちゃんが十年も臭い飯を食ってきたと思ってるんだ」

火野は誰にということもなく一気にまくし立てながら、猛スピードで刑務所の官舎群を走り抜け、高速道路へと向かった。

帰りの阪神高速は思いの外に空いていて、ほとんど渋滞しなかった。火野は誰かに追われているかのように先行車をつつぎに追い抜き、制限速度を二、三十キロも超えて突っ走った。

「まったく、女は感情の増幅器だよ。そうだろう？ いったんそれにかかったら、取るに足らぬものまでが、たちまち、何やら重大なものに増幅されてしまうんだ。悲しいと言うかわりに、女は涙を流して泣き叫ぶ。まるで、そこに

自分の運命がかかっているようにだ。そうやって、自分を納得させるかわりに、相手を威嚇するんだ。そうだろう？ところが、何が悲しいのかと言えば、ちよつと腹が空いていただけなんだ。それが女の増幅器にかければ、一緒に歩いてきた男が空腹を察してくれなかったのは、愛情がないからだ、とくる。あげくの果てに、私をセックスの捌け口としか思っていないんだ、とわめき立てる……」

火野はひとりでしゃべっていた。しきりに「そうだろう？」を話の間にはさむのだが、それは助手席の水間に同意を求めているというよりも、自分がしゃべっている言葉の間に空白ができてしまうのを怖れているような感じだった。水間が時おりあいまいな返答をして後ろをうかがうと、土居は火野の話を聞いているのかいないのか、いつ見ても眼をつむって腕組みしていた。

「月岡に妹がいるらしいとは聞いていたが、あれほど似てるとは思わなかったぜ」

「ああ」

「それに姉以上の美人だ」

火野は後ろの土居を意識してか、水間の方に肩を近づけて声をひそめ、ヒッヒッと齒の間で笑った。

水間は際限のない火野の饒舌をあびながら、先ほど真理子の妹が現れてからの短かい場面にこだわっていた。浅黒

いと言ってもいい火野の精悍な顔がかすかに蒼ざめていたような気がした。真理子の妹が「殺したのね」と詰問した口調にもひっかかっていた。それに、巨漢の土居が武骨な顔を少年のように赤らめたのは、どうしてなのだろう？あの女が激昂したのも、その直後だった……。

水間はそうした情景を想い浮べて、だが、と思った。殺人事件の加害者と被害者の肉親が、十年ぶりに対面したのだ。おれや火野にしても、あの事件に無関係な人間ではない。そんな連中が思わぬときに出会えば、当然の反応だったかも知れない。こだわることはないのだ。了解できぬことは、ともかくカッコに入れておくのが何よりだ。何でもないことなら、やがて忘れる。問題は宙ぶらりんの状態にどこまで耐えられるかだ、と、水間は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

豊中インターから名神高速に流れ込むと、ジープがさらに速度を上げた。確か十年ほど前にお祭り騒ぎがあったなあと思いつつ、万国博覧会場の跡地を左側に見たところから、水間は頭の芯に軽い鈍痛を覚えていた。

真新しい住宅やビルディングが波を打つてとめどもなくひろがっていく北摂の丘陵地帯を引き裂いて、高速道路が巨大な生き物のようにうねっている。路面の両側に防音壁が果てしなく続く。左右の視界がさえぎられる。水間は防